

文化財調査報告書第6集

北日ノ崎窯跡

昭和63年3月

村田町教育委員会

北日ノ崎窯跡

序 文

村田町には私たちの祖先が残した多数の文化財があります。特に、千塚地区には古墳時代の遺跡として浅間神社古墳などがあり、古代より人間生活に最適の条件をそなえた所と思われまます。

このたび、千塚地区の北日ノ崎地内に土地改良事業が行われ丘陵面を掘削中に焼土らしきものを発見し、それが4期の窯跡であることが明らかになりました。

この北日ノ崎窯跡は、奈良時代のものとして当地域では発見されていない遺跡でもあり、窯跡の全容を知る上で貴重な資料になると考えられます。

そこで、文化財の保護上、現状保存するかどうかで関係各位にご協力をお願いしました。

しかし、当該遺跡は、崖の上部にあって砂質土壌ということもあり、自然崩壊の恐れがあるので、後世の文化財の記録として残すべく事前の発掘調査を実施することになったのです。

本報告書は、その概要をまとめたものでありますが、多くの方々にご高覧いただき、村田町の歴史を考える資料としてご活用いただければ幸いです。

最後に、この発掘調査や報告書作成にあたりご指導いただきました宮城県文化財保護課の諸先生方をはじめ、ご協力をいただきました関係の皆様には深く感謝を申し上げます。特に、工事を担当されていた今野建設の皆様には、文化財保護の重要さをご理解をいただいたことに対し心から感謝申し上げます。

昭和 63 年 3 月

村田町教育委員会 教育長 森 良 一

例 言

1. 本書は宮城県柴田郡村田町の北日ノ崎窯跡の発掘調査報告書である。
2. 本書における土色についての記述には『新版標準土色帖』（1973年）を利用した。
3. 本書の第1図は国土地理院発行の1/25,000地図「大河原」を、写真図版1は同院発行の空中写真（C TO-75-28 C28-17）を複製して使用した。
4. 発掘調査の記録や整理に関する資料および出土品については、村田町教育委員会が保管し求めに応じて公開している。
5. 本書の作成は宮城県教育委員庁文化財保護課が担当し、整理・執筆は課員の検討を経て鈴木真一郎・真山悟が行った。

調査要項

遺 跡 名：北日ノ崎窯跡

所 在 地：宮城県柴田郡村田町沼辺字北日ノ崎

発掘調査面積：200 m²

調 査 期 間：昭和62年（1987年）6月22日～6月24日

調 査 主 体：村田町教育委員会

調 査 担 当：宮城県教育委員会

調 査 参 加 者：村田町教育委員会社会教育課

丹野広伸・後藤和夫・遠藤裕悦郎・高橋徳夫・高橋定光・大宮正夫

宮城県教育庁文化財保護課

進藤秋輝・加藤道男・真山 悟・阿部博志・古川一明・鈴木真一郎

村田町文化財保護委員

佐々木安彦・佐藤信一

有 志

二瓶和郎・佐藤幸治郎・吉野 昇・二瓶金作・佐藤正二・蘇武達也

太田正孝・今野幸衛

目 次

例 言・調査要項	
I はじめに	1
調査に至る経過	1
遺跡の位置と環境	1
調査の方法と経過	2
II 発見された遺構と出土遺物	3
(1) 1号窯跡	3
(2) 2号窯跡	4
(3) 3号窯跡	10
(4) 4号窯跡	12
III まとめと考察	17
(1) 遺 構	17
(2) 出土遺物	17
引用・参考文献	19
写真図版	20

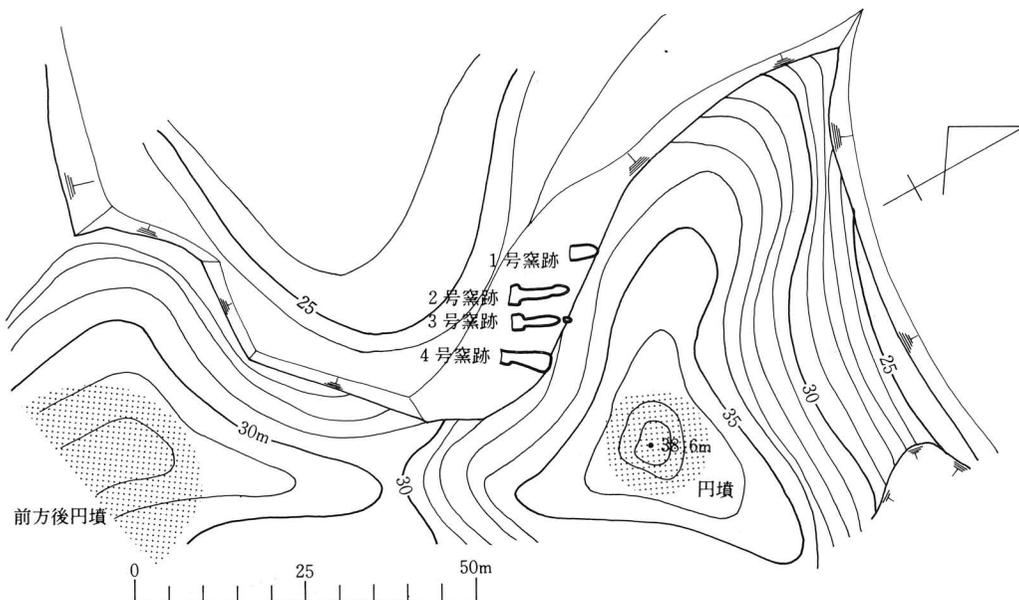
I はじめに

〔調査に到る経過〕 本遺跡は、昭和62年6月9日に町内の土木業者が農地基盤整備のため千塚山古墳群のある丘陵南西斜面を土取りしていたところ、発見されたものである。ただちに村田町教育委員会さらに宮城県教育委員会に遺跡発見の連絡がなされ、翌日宮城県教育庁文化財保護課と村田町社会教育課との現地における協議結果、6月下旬に発掘調査を行うことになった。



No	遺跡名	時代	種別	No	遺跡名	時代	種別
1	北日ノ崎竊跡	奈良	竊跡	11	日向前遺跡	縄文・古墳・古代	包含地
2	千塚山古墳群	古墳	古墳	12	寄井横穴古墳	古墳(後)	横穴古墳
3	千塚山A古墳	古墳	円墳	13	山下横穴古墳群	古墳	横穴古墳
4	千塚山古墳	古墳	前方後円墳	14	堀内遺跡	古代	包含地
5	日ノ崎遺跡	古墳・古代	包含地	15	宮下遺跡	古代	包含地
6	鳴館古墳	古墳	前方後円墳	16	方ノ作遺跡	古代	包含地
7	打越穴古墳群	古墳(後)	横穴古墳	17	九蔵遺跡	縄文・古代	包含地
8	千葺遺跡	古代	包含地	18	盛田遺跡	奈良	包含地
9	打越遺跡	古代	包含地	19	蛇沢遺跡	古代	包含地
10	大在家遺跡	古代	包含地	20	台ノ山遺跡	縄文~古代	集落跡

第1図 本遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図 北日ノ崎窯跡地形図

〔遺跡の位置と環境〕 北日ノ崎窯跡は村田町沼辺字北日ノ崎にある奈良時代の須恵器窯跡である。村田町役場の南5.7 m に位置する。村田盆地の西側には南北に延びる標高150～200 m の低い丘陵地があり、その東麓は白石川支流の新川、松尾川、荒川等の小河川によって開析されている。本遺跡はその丘陵が村田盆地南縁をほぼ町境に沿って張り出す部分の南西向き斜面に所在する。遺跡の標高はほぼ30 m である。

周辺の遺跡についてみると、本遺跡のある丘陵には千塚山古墳（前方後円墳）・千塚山A古墳（円墳）があり、そのほかにも高塚古墳が散見される。また、丘陵麓に沿って横穴古墳群や須恵器・土師器の散布する古代の遺跡が多く、台ノ山遺跡では奈良時代の住居跡が発見されている（阿部・千葉1980）。

柴田郡内の古代の窯跡は、他に2遺跡知られている。柴田町兎田窯跡は奈良時代あるいはそれ以前に遡ると考えられる瓦窯跡で（渡辺1984, 高野1984）、村田町三本檜窯跡は平安時代の須恵器窯跡である。また、本遺跡の東南方2.8 kmには礎石や布目瓦が発見されている大河原町中屋敷前遺跡があり、古代の郡衙跡あるいは寺院跡の可能性が指摘されている（平間1980）。

〔調査の方法と経過〕 遺構として窖窯跡4基が地山面（地山は黄褐色の砂質土）で検出されており、灰原は土取りによって大部分削られていた。6月22日調査を開始し、直ちに堆積土の除去作業にはいった。遺構の実測図（平面図・断面図）は遣り方測量により縮尺20分の1で作成し、遺構は位置は平板測量により縮尺500分の1の地形図に書き入れた。また、適宜写真撮影を行い、6月24日までに調査を一切終了した。出土遺物には須恵器のほか、土錘、焼台があり、総量は平箱11箱分である。

II 発見された遺構と出土遺物

(1) 1号窯跡

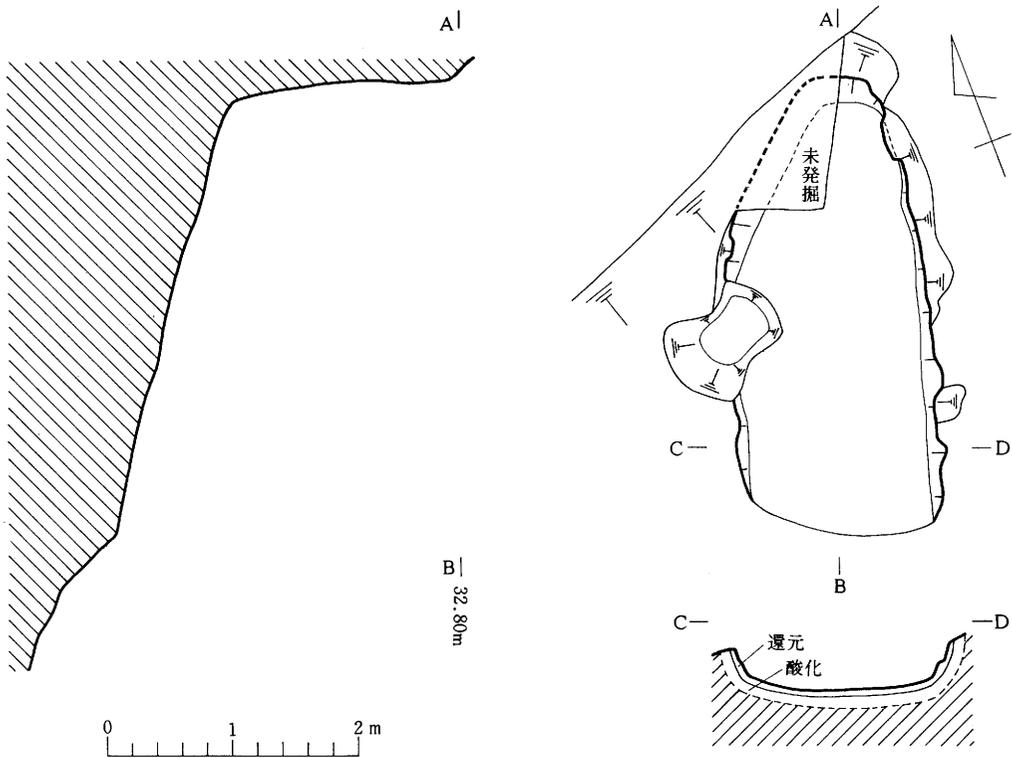
地下式窖窯である。削平が著しく、焼成室の中央から煙道にかけては残存するが、他は全て失われている。

〔煙道〕 焼成室の先端に位置している。平面形は残存状況から円形と推定されるもので、焼成室奥壁からの立ち上がりはほぼ垂直である。

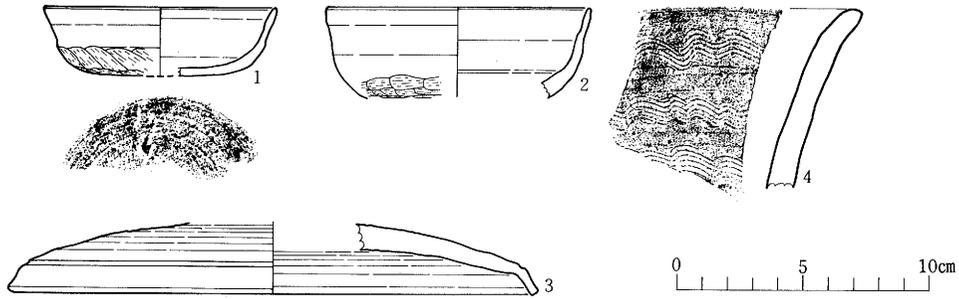
〔焼成室〕 燃焼室寄りの部分が失われているが、平面形は中央に最大幅をもつ胴張り形と考えられる。側壁は内壺ぎみに立ち上がっている。床面はゆるい段状の凹凸がみられるが、概ね平坦に近く、約15度の角度で傾斜する。表面は還元・硬化が著しい。

〔中軸線方向〕 N-20°-Eである。

〔規模〕焼成室 長さ(残存長) 3.4m 幅1.5m 残存高1.7m



第3図 1号窯跡



No	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No	図版No	No	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No	図版No
1	床面	坏	B	9.2	約7	2.8	1	—	3	床面	盖	B	20.6	—	—	76	—
2	床面	坏	B	13.4	—	—	74	—	4	床面	甕	A 2	—	—	—	2	4-13

第4図 1号窯跡出土遺物 須恵器

〔出土遺物〕 窯の床面・崩落土から須恵器の坏・蓋・甕が出土している。

坏（第4図1・2） 椀状の器形である。体部中位にゆるい稜をもち、稜から口縁部までは外反ぎみに立ち上がる。底部は手持ちヘラ削りが施され、体部下位にまで及んでいる。1にはヘラ切り痕が残っている。

蓋（第4図3） 天井部から口縁部にかけて若干内窪する器形であり、ロクロ目が明瞭に残る。口縁部は比較的長く斜め下方に屈曲し、その角の外側に浅い沈線がまわる。口径が大きく盤状の器に伴うものと思われる。

甕（第4図4） 頸部から口縁部にかけて外反して立ち上がる器形である。口縁部は縁帯を持たず、丸みを帯びる。3段にわたる櫛描き波状文が施される。

(2) 2号窯跡

地下式窖窯である。削平により煙道と前庭部の一部が失われている。

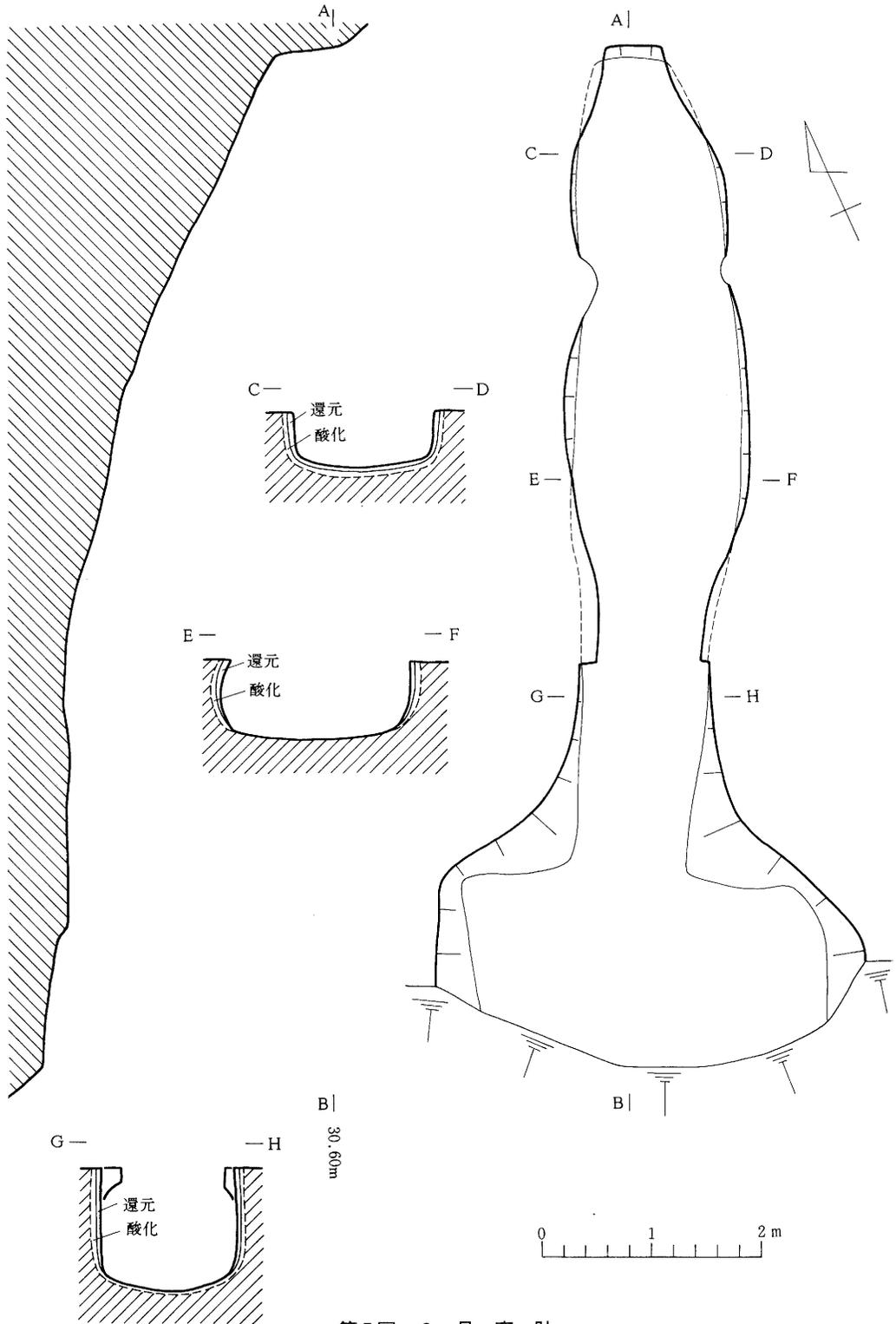
〔焼成室〕 平面形は中央下寄りに最大幅をもつ胴張り形である。先端はやや丸みをもつものの側端が角張る。側壁は先端寄りがほぼ垂直に立ち上がるのに、中央から下寄りには内湾ぎみであり、断面形は最大幅の部分では半円形になるものと推定される。床面は平坦で、約20度の角度で傾斜する。表面は還元され硬化するが、床面下寄りの部分はその変化が弱い。

〔燃烧室〕 平面形は左右壁が平行する長方形である。側壁はほぼ垂直に立ち上がっており、焼成室との境部分は地山を削り出して、トンネルの入り口状になっている。表面は還元され硬化している。床面は平坦で、表面は赤化するが、さして硬くはない。

〔焚口部〕 特に施設は認められない。

〔前庭部〕 平面形は壁が焚口部から左右に広がった形で、方形を基調としている。壁はゆるやかに立ち上がり、床面は多少凹凸があって、中央が皿状にくぼむ。

〔中軸線方向〕 N-22°-Eである。



第5图 2号窠跡

〔規模〕 全長（残存長）9.3m

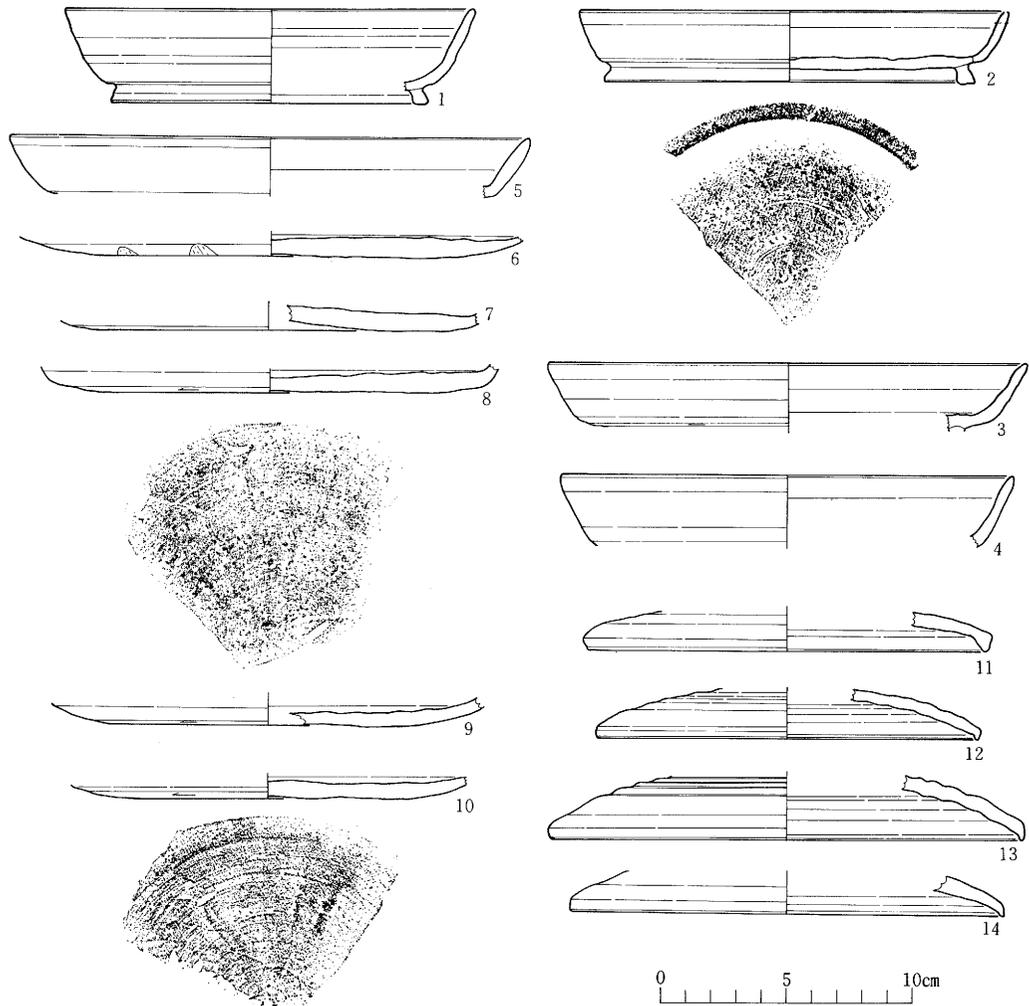
焼成室 長さ 5.6m 幅 1.6m 残存高 1.1m

燃烧室 長さ 1.9m 幅 1.3m 残存高 1.1m

焚口部 幅 1.0m 残存高 1.1m

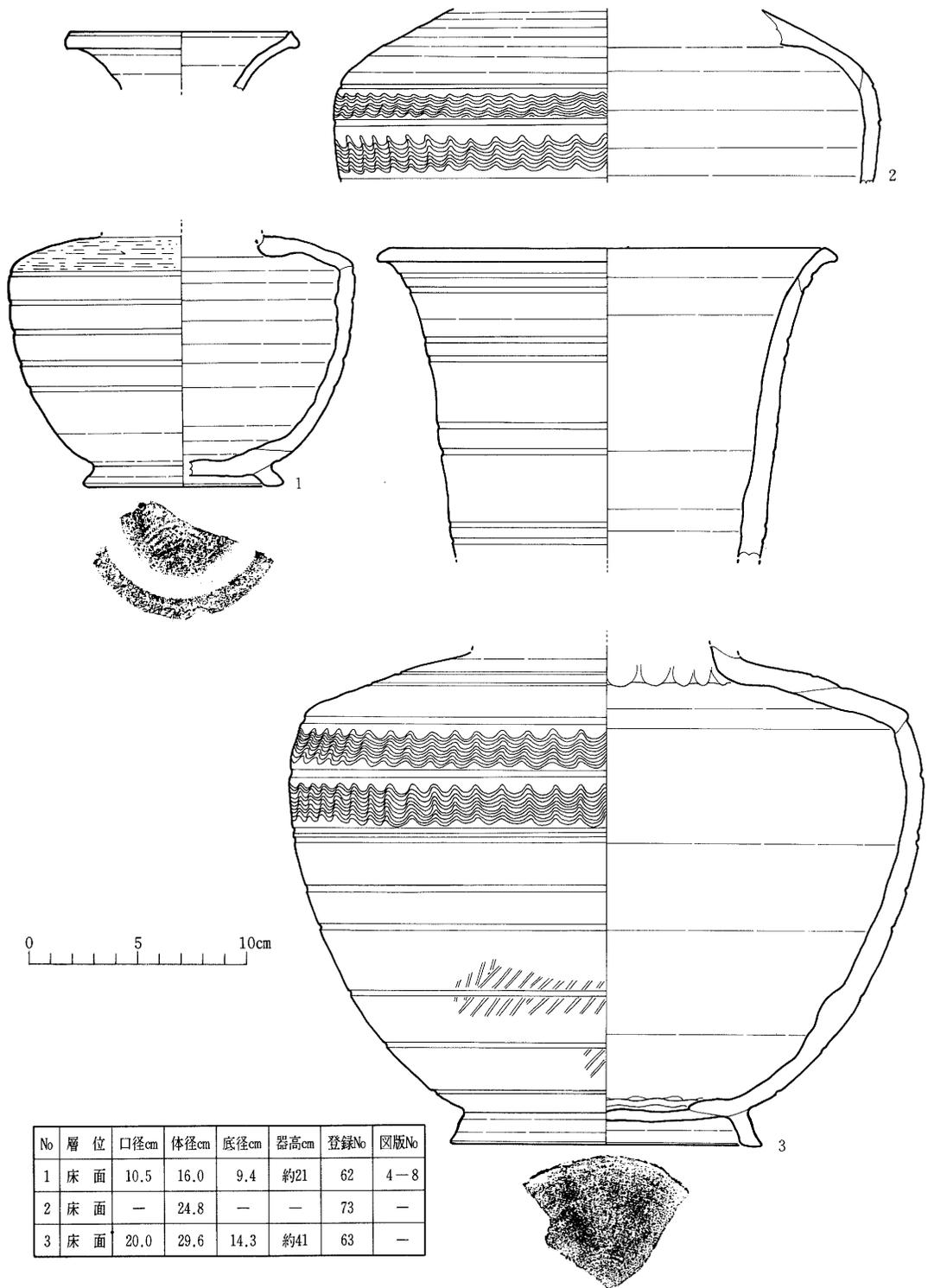
前庭部 長さ（残存長）1.7m 幅（上端）3.9m（下端）3.2m 残存高 1.1m

〔出土遺物〕 窯の床面・灰原・崩落土から須恵器の高台付坏・盤・長頸壺・擂鉢・甕のほか焼



No	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No	図版No	No	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No	図版No
1	床面	高台付坏		16.2	12.4	3.8	42	—	8	床面	盤	B 1	—	14.2	—	48	—
2	床面	盤	A	16.6	15.0	2.9	40	4-7	9	床面	盤	B 1	—	12.2	—	47	—
3	床面	盤	A	19.1	15.2	(2.6)	44	—	10	床面	盤	B 1	—	11.6	—	46	—
4	床面	盤	A	18.0	—	—	43	—	11	床面	蓋	B	15.7	—	—	51	—
5	床面	盤	A	20.7	19.7	(2.4)	71	—	12	床面	蓋	B	15.1	—	—	52	—
6	床面	盤	B 2	—	14.4	—	49	—	13	床面	蓋	B	18.4	—	—	54	—
7	床面	盤	B 2	—	14.0	—	50	—	14	床面	蓋	B	17.2	—	—	56	—

第6図 2号窯跡出土遺物(1)須恵器



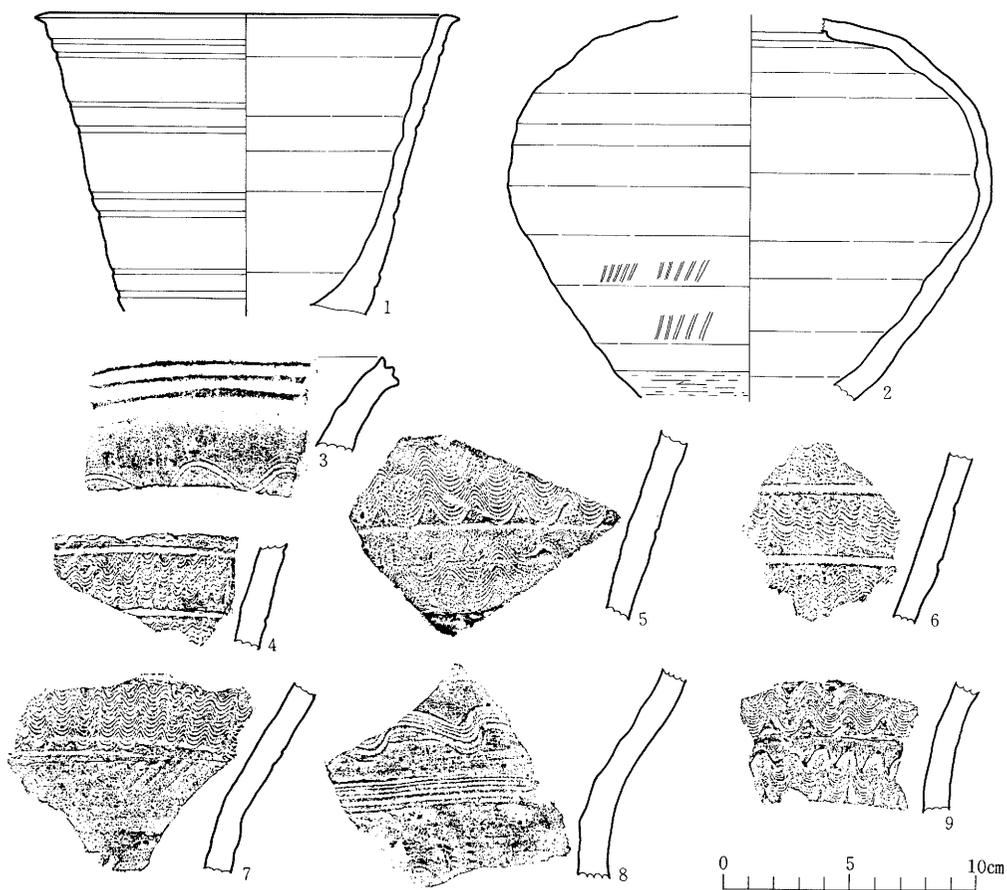
No	層位	口径cm	体径cm	底径cm	器高cm	登録No	図版No
1	床面	10.5	16.0	9.4	約21	62	4-8
2	床面	—	24.8	—	—	73	—
3	床面	20.0	29.6	14.3	約41	63	—

第7図 2号窯跡出土遺物(2)須恵器・長頸壺

台が出土している。

高台付杯(第6図1) 浅い皿状の器形である。体部下端は丸みを帯び、口縁部までは外傾して直線的に立ち上がる。底部は回転ヘラ削りが施される。高台は下端が若干肥厚するもので、底部外周より内側に付いている。

盤(第6図2~10) 高台が付くもの(2~5)と付かないもの(6~10)がある。2は器高に比して底径が大きい、浅い皿状の器形である。体部は下端が緩く屈曲し、口縁部までは急角度に直線的に立ち上がる。底部は回転ヘラ削りが施される。高台は下端が若干肥厚するもので、底部外周より内側に付いている。3~5は底部および高台が失われているが、2と同様の器形と思われる。6~10は概して底径が大きく、底部はナデ調整が施されるもの(6・7)と回転



No	層位	種別	分類	口径cm	体径cm	登録No	図版No	No	層位	種別	分類	登録No	図版No
1	灰原	播鉢		16.8	—	61	4-9	6	崩落土	甕	A 1	59	5-1
2	崩落土	長頸壺		—	19.6	60	—	7	灰原	甕	A 1	70	5-2
3	床面	甕	A 2	—	—	57	4-10	8	床面	甕	A 2	58	5-3
4	床面	甕	A 1	—	—	64	4-11	9	床面	甕	A 2	66	5-4
5	崩落土	甕	A 1	—	—	65	4-12						

第8図 2号窯跡出土遺物(3)須恵器

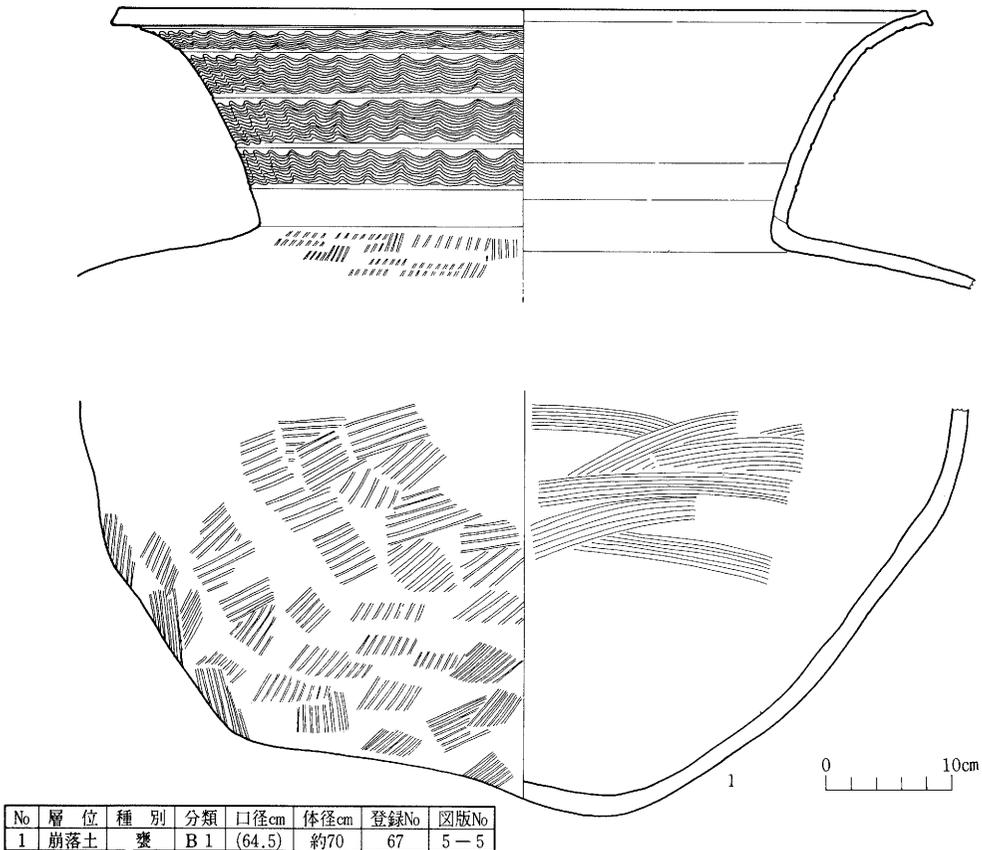
ヘラ削りが施されるもの（8～10）がある。

蓋（第6図11～14） 天井部から口縁部にかけて若干内弯する器形である。口縁部は短く、下方に屈曲する。

長頸壺（第7図1～3，第8図2） 肩の張った器形や肩部が緩やかに曲がる球体状の器形がある。頸部から口縁部までは外反して立ち上がり、口縁端部は外側に引き出して作られる。高台は端部が肥厚する形である。頸および体部には並行沈破線、櫛描き波状文が施されるものがある。また、体部外面に回転ヘラ削りや平行叩き目を消した痕跡、内面に指による押さえの痕跡が認められるものがある。底部切り離し技法については1に糸切り痕が認められる。

播鉢（第8図1） 体部は直線状に立ち上がり、2条の並行沈線が4段認められる。口縁部は端部を外側に引き出して作られる。

甕（第8図3～9，第9図1） 3～9は頸部・口縁部が外反して立ち上がる器形である。3は口縁部が三方向に引き出して作られ、頸部に櫛描き波状文が施される。4～7は並行沈線が施された後に櫛描き波状文が施される。8は櫛描きの横位直線と波状文が施され、9は櫛描き



第9図 2号窯跡出土遺物(4)須恵器

波状文だけが施される。1は肩部の張る器形と思われるが、全体に焼き歪みが著しい。頸が肩部から強く屈曲し、口縁部まで外反して立ち上がる。口縁端部に下方に引き作られる。頸部には並行しに沈線が施された後に櫛描き波状文が施される。肩部・体部・底部の外面には平行叩き目、体部内面には櫛目状の押さえ目が認められる。

(3) 3号窯跡

地下式窖窯である。削平が著しく、煙道および焼成室と前庭部が一部が失われている。

〔焼成室〕 先端寄りの一部を欠くが、残存形から平面形は中央に最大幅をもつ胴張り形と考えられる。側壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床面は平坦であり、約15度の角度で傾斜している。表面は還元・硬化が著しい。

〔燃燒室〕 平面形は左右側壁が平行する長方形である。側壁はほぼ垂直に立ち上がっており、床面は平坦である。表面は還元され硬化している。

〔焚口部〕 特に施設は認められない。

〔前庭部〕 平面形は壁が焚口部から左右に広がった形で、方形は基調としている。壁はゆるやかに立ち上がっており、左壁においては表面が赤変している。床面は凹凸があり、特に中央は土壌状にくぼんでいる。

〔堆積土〕 窯の崩落以前の堆積土が4枚認められる。そのうち2枚は炭化物層である。

〔中軸線の方向〕 N-26°-Eである。

〔規模〕 全長(残存長) 9.3 m

焼成室 長さ(残存長) 4.9 m 幅 1.3 m 残存高 0.5 m

燃燒室 長さ 2.4 m 幅 0.9 m 残存高 0.8 m

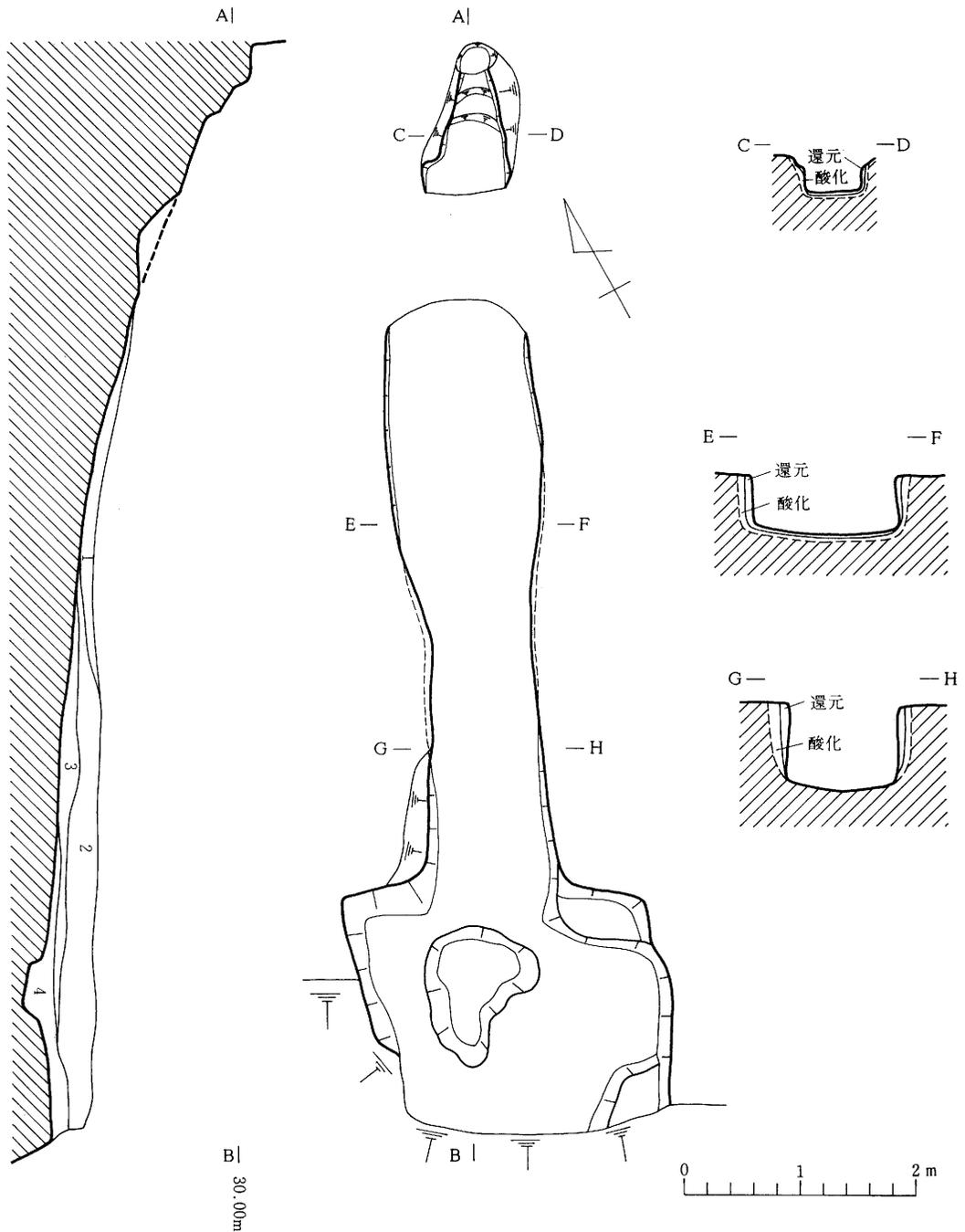
焚口部 幅 1.0 m 残存高 0.9 m

前庭部 長さ(残存長) 1.9 m 幅 2.5 m 残存高 0.9 m

〔出土遺物〕 窯の床面・堆積土1～4層・灰原・崩落土から須恵器の坏・甕が出土している。

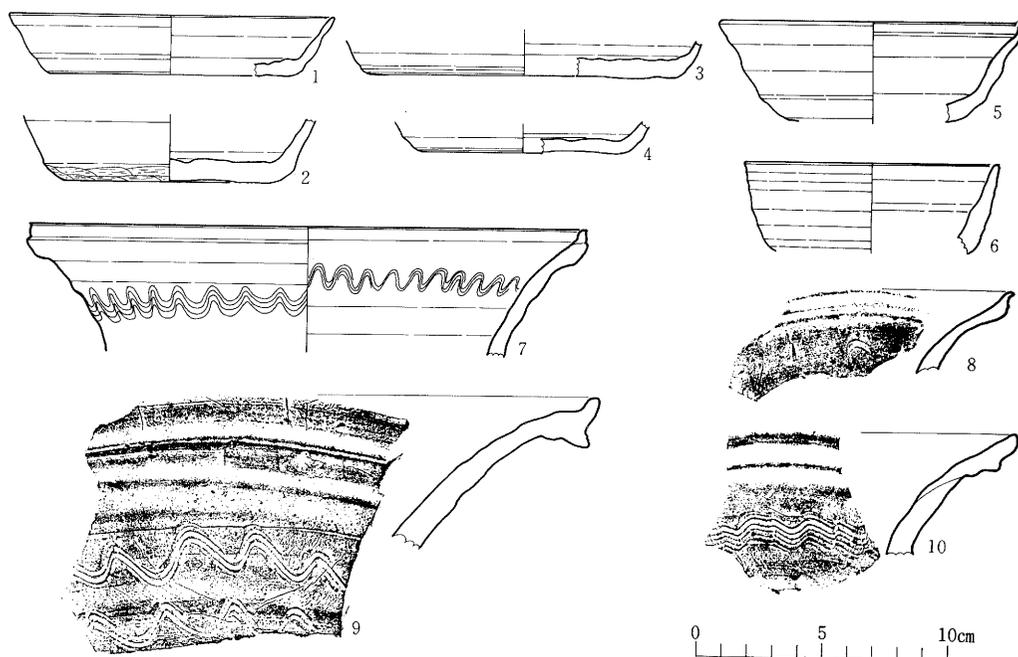
坏(第11図1～6) 1～4は浅い皿状の器形である。体部下位に稜をもち、口縁部まで1・2・4は若干外傾して直線的に立ち上がり、3は内湾して立ち上がる。底部はヘラ切り後1・4はナデ調整、2は手持ちヘラ削り、3は回転ヘラ削りが施される。5・6は椀状の器形である。体部下位に稜を持ち、5は体部下位～中位が内湾し、中位～上位が外反して立ち上がり、口縁部は短く肥厚している。6は口縁部まで内湾ぎみに立ち上がり、ロクロ目が明瞭である。

甕(第11図7～10) 頸部から口縁部にかけて外反して立ち上がる器形である。口縁端部は上方あるいは上下に引き出して作られている。頸部外面に櫛描き波状文が施されており、7には頸部内面にも櫛描き波状文が施されている。



No	土色	土性	備考
1	炭化物層		
2	暗赤褐色2.5YR $\frac{3}{4}$	砂質シルト	炭化物、焼土を含む
3	炭化物層		
4	にぶい赤褐色2.5YR $\frac{5}{2}$	砂質シルト	炭化物、焼土を含む

第10図 3号 窯跡



No	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No	図版No	No	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No	図版No
1	灰原	坏	A 3	12.8	9.6	2.4	8	—	6	灰原	坏	B	10.1	—	(3.6)	69	—
2	灰原	坏	A 2	—	8.2	—	11	—	7	灰原	甕	A 2	23.0	—	—	3	5-7
3	灰原	坏	1	—	12.4	—	9	—	8	床面	甕	A 2	—	—	—	4	5-8
4	灰原	坏	1	—	7.6	—	10	—	9	灰原	甕	A 2	—	—	—	6	5-9
5	灰原	坏	B	12.2	約6	約4	7	—	10	灰原	甕	A 2	—	—	—	5	5-6

第11図 3号窯跡出土遺物 須恵器

(4) 4号窯跡

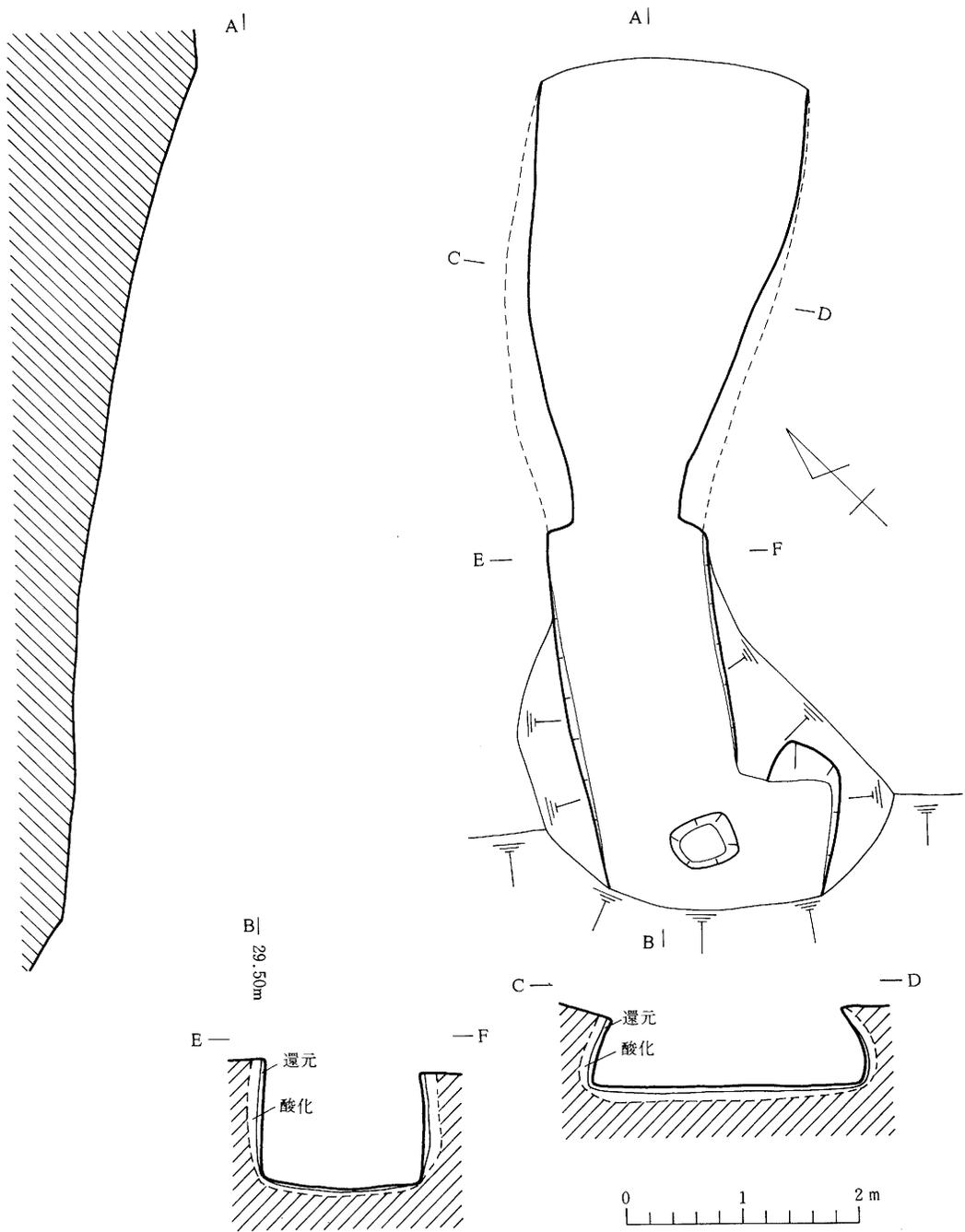
地下式窖窯である。煙道と前庭部の一部が削平により失われている。

〔焼成室〕 平面形は先端部を欠くため明確ではないが、残存形から中央に最大幅をもつ胴張り形と考えられる。側壁は強く内弯しており、断面形は半円形になるものと推定される。床面はほぼ平坦で、約15度の角度で傾斜している。側壁の表面は還元され、かなり硬化しているが、床面は側壁ほどではない。

〔燃烧室〕 中軸線が焼成室に対しやや折れ曲がっているもので、平面形は左右側壁が平行する長方形である。側壁はほぼ垂直に立ち上がっており、焼成室との境部分は地山を削り出して、トンネルの入り口状になっている。床面は平坦である。表面は還元され硬化しているが、床面はその程度が弱い。

〔焚口部〕 特に施設は認められない。

〔前庭部〕 平面形は方形を呈すると推定されるもので、左壁が燃烧室から直線的に続くのに対して、右壁は80 cmほど外側に張り出した位置にある。壁は急角度に立ち上がる。床面は皿状に



第12图 4号 窠 跡

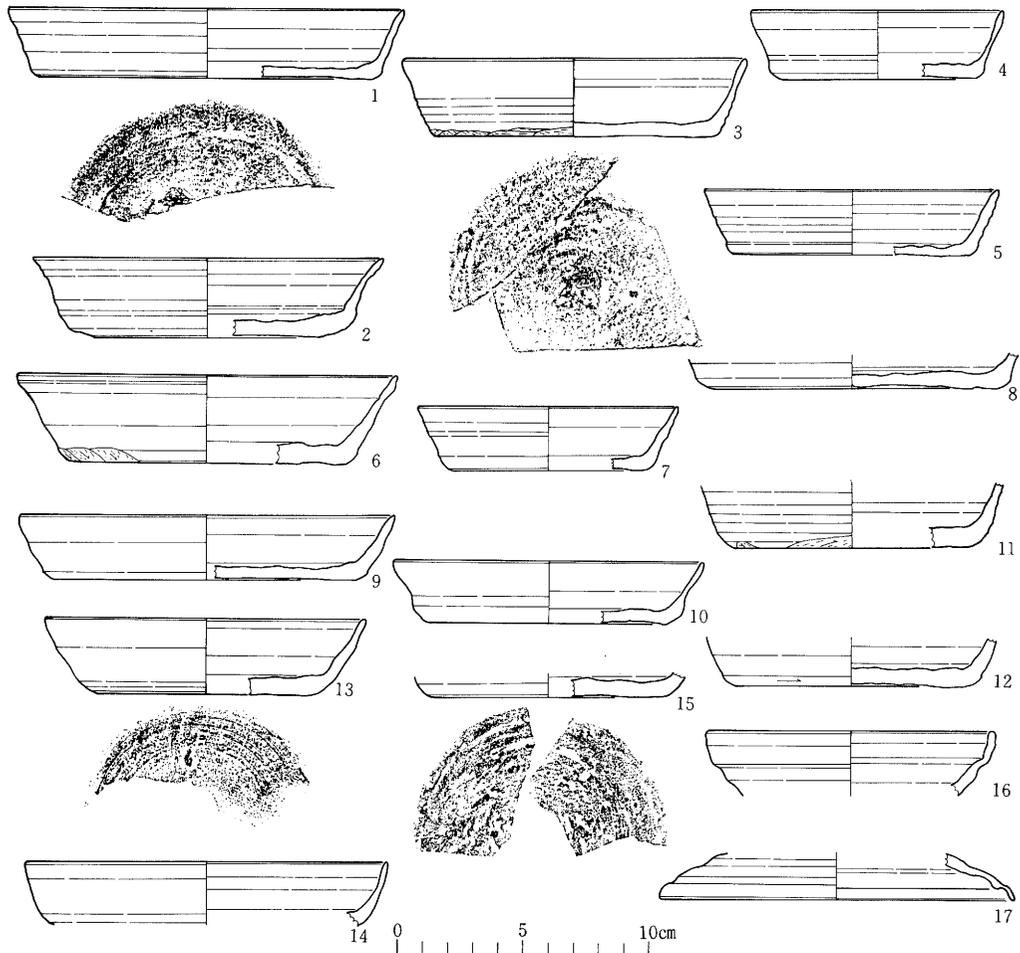
なっており、中央に長軸約50 cm、深さ約30 cmの隅丸方形のピットが確認されている。

〔中軸線の方形〕 約成室の軸線は N-45°-E であるのに対し、燃焼室の軸線は N-31°-E である。

〔規模〕 全長（残存長）7.3 m

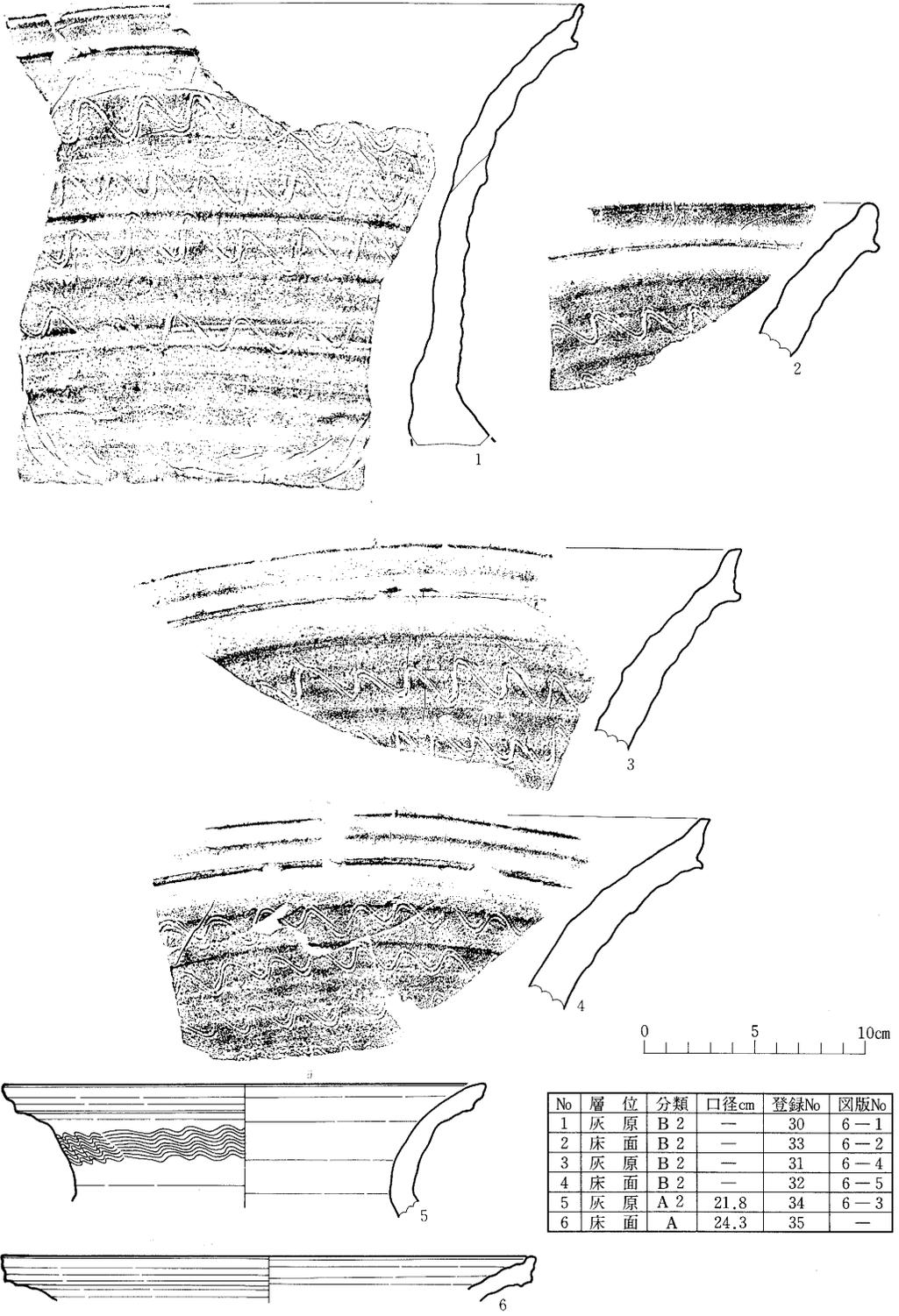
焼成室 長さ（残存長）4.1 m 幅 2.4 m 残存高 1.0 m

燃焼室 長さ 2.2 m 幅 1.3 m 残存高 1.1 m



No	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No	図版No	No	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No	図版No
1	床面	坏	A 1	15.6	13.1	2.8	15	—	10	崩落土	坏	A 3	12.2	9.2	2.6	19	—
2	崩落土	坏	A 1	14.0	9.0	3.2	20	—	11	崩落土	坏	A 2	—	9.4	—	29	—
3	崩落土	坏	A 2	13.6	11.0	3.2	12	4-1	12	崩落土	坏	1	—	9.2	—	28	—
4	床面	坏	A 3	10.0	7.8	2.8	16	4-2	13	床面	坏	A 1	12.8	8.5	3.2	13	4-6
5	崩落土	坏	A 3	11.7	10.0	2.6	14	4-3	14	床面	坏	A	14.4	約12	2.6	75	—
6	床面	坏	A 2	15.1	11.0	3.6	18	4-4	15	床面	坏	3	—	9.4	—	21	—
7	崩落土	坏	A 3	10.4	7.8	2.6	72	—	16	床面	坏	A	—	—	—	22	—
8	崩落土	坏	1	—	11.1	—	26	—	17	崩落土	蓋	A	11.4	—	—	39	—
9	床面	坏	A 1	15.0	12.0	2.6	17	4-5									

第13図 4号窯跡出土遺物(1)須恵器



No	層位	分類	口径cm	登録No	図版No
1	灰原	B 2	—	30	6-1
2	床面	B 2	—	33	6-2
3	灰原	B 2	—	31	6-4
4	床面	B 2	—	32	6-5
5	灰原	A 2	21.8	34	6-3
6	床面	A	24.3	35	—

第14図 4号窯跡出土遺物(2)須恵器甕

焚口部

幅 1.3 m 残存高 1.1 m

前庭部 長さ(残存長) 0.9 m 幅 2.0 m 残存高 1.1 m

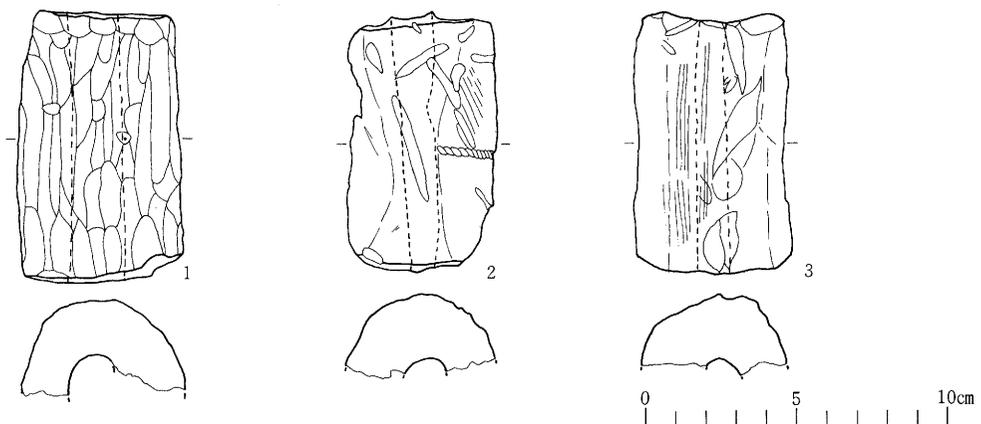
〔出土遺物〕 窯の床面・灰原・崩落土から須恵器の坏・蓋・甕のほか、土錘が出土している。

坏(第13図1~16) 1~16は浅い皿状の器形である。1~12は体部下位に稜をもち、口縁部まで1・2は外反して立ち上がり、3は体部中位までは内湾ぎみに、体部中位から口縁までは外反して立ち上がる。また、4~8は稜から口縁部まで直線状に、9~12は内湾して立ち上がる。13~15は体部下位に稜をもたず口縁部まで内湾して立ち上がる。16は体部中位がくびれている。底部は1・2・8・9・12・13は回転ヘラ削り、3・11は手持ちヘラ削り、4~7・10・15は部分的にナデ調整が施される。底部切り離し技法について、1・3~8・15にはヘラ切り痕が残っている。

蓋(第13図17) 天井部は内湾して口縁部にいたる。丸みを帯びたかえりが付くのが特徴である。

甕(第14図1~6) 1~4は大形の甕と思われる。頸部から口縁部にかけて外反して急角度に立ち上がる器形であり、口縁端部は上下に引き出して作られている。頸部には歯数の少ない櫛描き波状文が段数にわたって施されている。5・6は前者よりも小形のものであるが、器形は似る。5には櫛描き波状文が施されている。

土錘(第15図1~3) 須恵質のもので長さ8 cm強の円柱状を呈し、太い貫通孔を有する。手捏ねによる整形で、1は手持ちヘラ削りが施され、調整が丁寧であるのに対し、2・3は表面に擦痕や縄目の圧痕等が見られる。



No	層位	長さcm	幅 cm	登録No	図版No	No	層位	長さcm	幅 cm	登録No	図版No
1	灰原	8.5	(5.0)	38	6-6	3	灰原	8.7	(5.4)	37	6-8
2	崩落土	8.5	(5.2)	36	6-7						

第15図 4号窯跡出土遺物(3)土錘

III まとめと考察

(1) 遺構

発見された4基の窯跡は地下式窖窯である。形態、構造についてはほぼ同様であるが、4号窯跡のみが焼成室と燃烧室との境で若干曲折している点、他と異なっている。利府町硯沢窯跡群（加藤・真山・佐藤他1987）には、同様に曲折する窯跡がみられ、曲折しないものを切っており僅かながらも次期差が認められている。それは近接する古い遺構を避けるためとみなされているが、本窯跡の場合特に近接、重複する遺構は存在していない。むしろ、遺構の配置を見れば斜面上の同一標高（ $H=28\sim 32$ m）に4～5 mの間隔をおいて並んでおり、その整然とした様は4基の窯跡が一つの群としてほとんど時期差なく機能していたものと考えられる。本遺跡では窯の曲折の有無を時期し理解するよりは窯の個別的な特徴と理解するほうが妥当と思われる。

また、窯の焼成室床面はいずれも $15\sim 20^\circ$ の傾斜を持っている。須恵器の焼成にあたっては2号窯跡にみられた焼台のほか各窯跡から出土している甕の破片を焼台の代わりに用いていたことが窺われる。

(2) 出土遺物

出土した須恵器には、坏・高台付坏・盤・蓋・長頸壺・擂鉢・甕の7器種がある。

1. 分類

以上の7器種について、形態、製作技法等から検討する。

〔坏〕 坏は浅めで体部が急角度に立ち上がる皿状のもの（A類）と深めの椀状のもの（B類）に大別され、図示できるものはA類13点、B類4点である。A類は体部下位に稜を持つものが多く、口径が概して小さいのが特徴である。さらに、底部調整技法には全面に回転ヘラ削りが施されるもの(1)、手持ちヘラ削りが施されるもの(2)、部分的にナデ調整が施されぬもの(3)がある。B類は個体数が少なく器形もそれぞれ異なる。底部調整の知りうるものはすべて手持ちヘラ削りが施される。両類とも、底部切り離し技法が判明するものはすべてヘラ切りである。

〔高台付坏〕 1点のみ出土している。坏A類と同様体部は浅い皿状の器であるが、体部下位に稜はみられない。高台は底部の少し内側に付く。

〔盤〕 体部下端が丸みをもって屈曲し急角度に短く立ち上がる器形で、高台が付くもの（A類）と付かないもの（B類）があり、図示できたものはA類4点、B類5点である。A類の底部調整は判明するものについては回転ヘラ削りである。B類には回転ヘラ削りが施されるもの(1)とナデ調整が施されるもの(2)がある。

第1表 遺物の出土状況

品 種	分類	1 号 窯		2 号 窯 跡		3 号 窯 跡		4 号 窯 跡		
		床 面	崩落土	床 面	灰 原	床 面	灰 原	崩落土	床 面	灰 原
坏	A 1							1	3	
	A 2						1	2	1	
	A 3						1	3	1	
	B	2					2			
高台付坏				1						
盤	A			4						
	B 1			3						
	B 2			2						
蓋	A							1		
	B	1		4						
長頸壺				4						
播鉢					1					
甕	A 1		2	1	1					
	A 2	1		3		1	3			1
	B 1		1							
	B 2								2	2
土 錘								1		2

〔蓋〕 天井部が若干内湾する器形で、かえりのあるもの（A類）とないもの（B類）に分類される。A類は1点のみ出土しており、B類は図示できたものが5点である。

〔長頸壺〕 図示できたものは4点である。肩部の張るものや緩やかに曲がるものがある。底部切り離し技法として糸切り痕が見られる。

〔播鉢〕 1点のみ出土している。体部が直線状に立ち上がり、口縁部は端部を外側に引き出して作られている。並行沈線が施される。

〔甕〕 遺物量として最も多い。法量によって小形のもの（A類）と大形のもの（B類）とに大別され、図示できたものはA類13点、B類5点である。両類とも頸部の施文には並行沈線と櫛描き波状文が施されるもの(1)と櫛描き波状文のみが施されるもの(2)とがある。

2. 出土状況

以上の分類と出土地点とを対応させたものが第1表である。比較的遺物量が多い窯跡についてみると、2号窯跡床面から高台付坏のほか、盤（A・B1・B2類）や蓋（B類）、長頸壺がまとまって出土しており、また、4号窯跡床面上から坏（A1・A2・A3類）がまとまって出土している。それぞれ器形が類似したもので占められることから、限られた時期に作られたものとみなされる。

次に窯跡間で出土遺物を比較してみると、3号窯跡灰原から4号窯跡と同種類の坏が出土しているほか、各窯跡から同様の甕が出土している以外は共通した出土遺物は少ない。特に前述の2号・4号窯跡の場合、坏・盤類で共通したものはない。1号・3号窯跡については遺物量が少なかったため明確な判断はできない。出土遺物の器種・種類の相違を時期差と考えることもできるが、本遺跡では前述の通りの窯の並びをふまえれば、時期差というより窯ごとの特徴

である可能性が強いことが指摘される。言い換えれば、本遺跡の出土遺物はほぼ同一時期のものであろうと思われる。

3. 出土遺物の年代

前述の出土遺物のうち、4号窯跡出土の坏類を中心にみると、これまで本遺跡と類似する皿状の坏が出土している窯跡には、色麻町日の出山窯跡群(岡田他1970)、田尻町木戸窯跡群(野崎1974,宮城県教育委員会1975)などがあげられる。

いずれの遺跡も皿状の坏は浅めで体部下位に稜を持つ器形であり、本遺跡とは非常によく似ているが、日の出山窯跡群の場合丸底風の坏がみられる点と底部切り離し技法が判明するものはすべて静止糸切りである点が異なっている。木戸窯跡群の場合、調査報告がなされておらず出土状況は不明であるが、今までに紹介されている出土遺物をみる限りでは、皿状の坏の器形は最もよく似ており、その他丸底風の坏がみられない点や底部切り離し技法に糸切りがみられない点も共通している。したがって、本遺跡の出土遺物の年代は木戸窯跡に相当すると考えられる。木戸窯跡群は出土瓦から日の出山窯跡群とともに8世紀前半に比定されており、本遺跡も8世紀前半に考えられる。4号窯跡出土のかえりがある蓋(蓋A類)に注目すれば、さらにその年代は8世紀初頭までさかのぼる可能性がある。

引用・参考文献

- 阿部博志・千葉宗久(1980):「台ノ山遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書II宮城県文化財調査報告書第62集』
- 岡田茂弘他(1970):「日の出山窯跡群」『宮城県文化財調査報告書第22集』
- 岡田茂弘・桑原滋郎(1974):「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」『研究紀要I』宮城県多賀城跡調査研究所
- 岡田茂弘・佐々木茂楨・桑原滋郎(1972):「長根窯跡群II」涌谷町教育委員会
- 加藤道男・真山 悟・佐藤則之他(1987):「硯沢・大沢窯跡他」『宮城県文化財調査報告書116集』
- 工藤雅樹(1969):「福島市小倉寺高畑遺跡発掘調査報告」『福島市の文化財』
- 桑原滋郎・辻 秀人(1976):「長根窯跡群III」涌谷町教育委員会
- 古窯跡研究会(1973):「陸奥国官窯跡群 — 台の原古窯跡群調査研究報告」『研究報告第2冊』
- 佐々木茂楨・桑原滋郎(1971):「長根窯跡」涌谷町教育委員会
- 白鳥良一(1980):「多賀城跡出土土器の変遷」『宮城県多賀城跡跡調査研究所研究報告VII』
- 高野芳宏(1984):「兔田窯跡の瓦について(メモ)」『之波太17号』柴田町郷土研究会
- 高橋富雄他(1972):「宮城県黒川郡大和町鳥屋遺跡調査報告」大和町教育委員会・大和文化財保護委員会
- 東北学院大学考古学研究所(1975):『鳥屋窯跡群三角田南地区発掘調査報告書』
- 東北学院大学考古学研究所(1983):「宮城県志田郡松山町次橋須恵器窯跡発掘調査報告」『松山町文化財調査報告書第1集』
- 中村 浩(1980):『須恵器』考古学ライブラリー5 ニューサイエンス社
- 野崎 準(1974):「東北地方における須恵器生産」『東北学院大学東北文化研究所紀要6号』
- 平間喜栄(1980):「中屋敷前遺跡」『大河原の文化財第1集』大河原教育委員会
- 宮城県教育委員会(1975):「宮城県文化財発掘調査略報」『宮城県文化財調査報告書第40集』
- 渡辺泰伸(1984):「柴田郡柴田町兔田窯跡確認調査報告」『之波太17号』柴田町郷土研究会

写 真 图 版



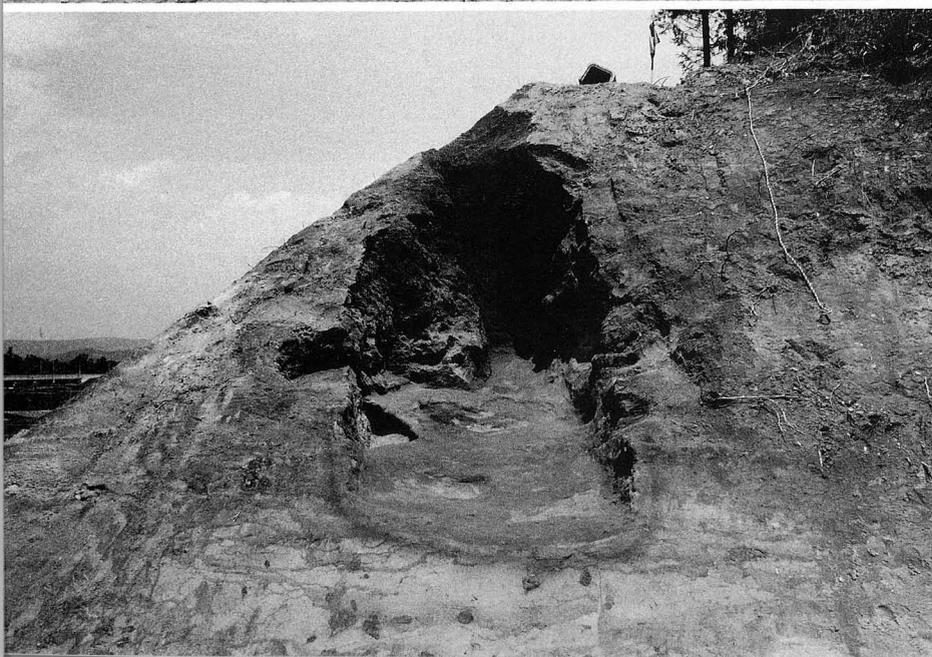
図版1 遺跡遠景(空中写真)



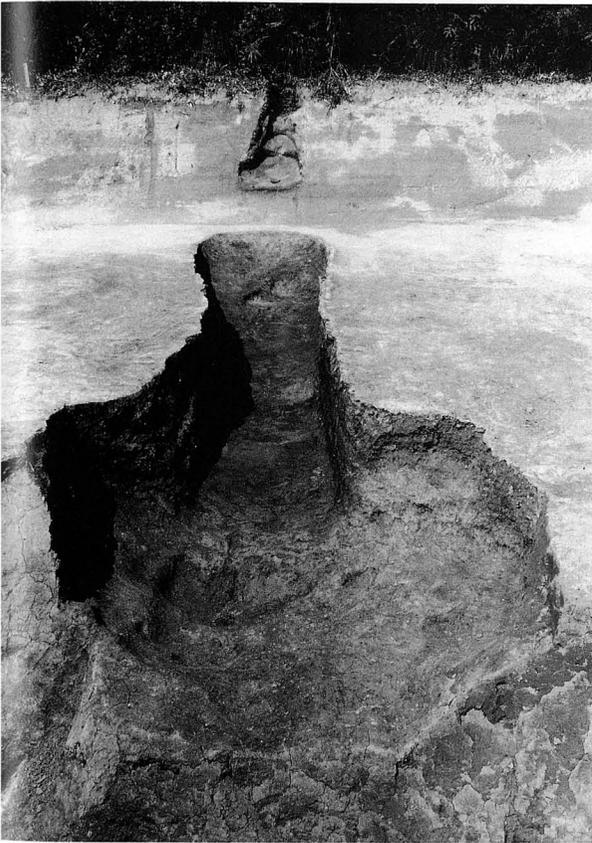
遺跡全景



発掘終了後



1号窯跡



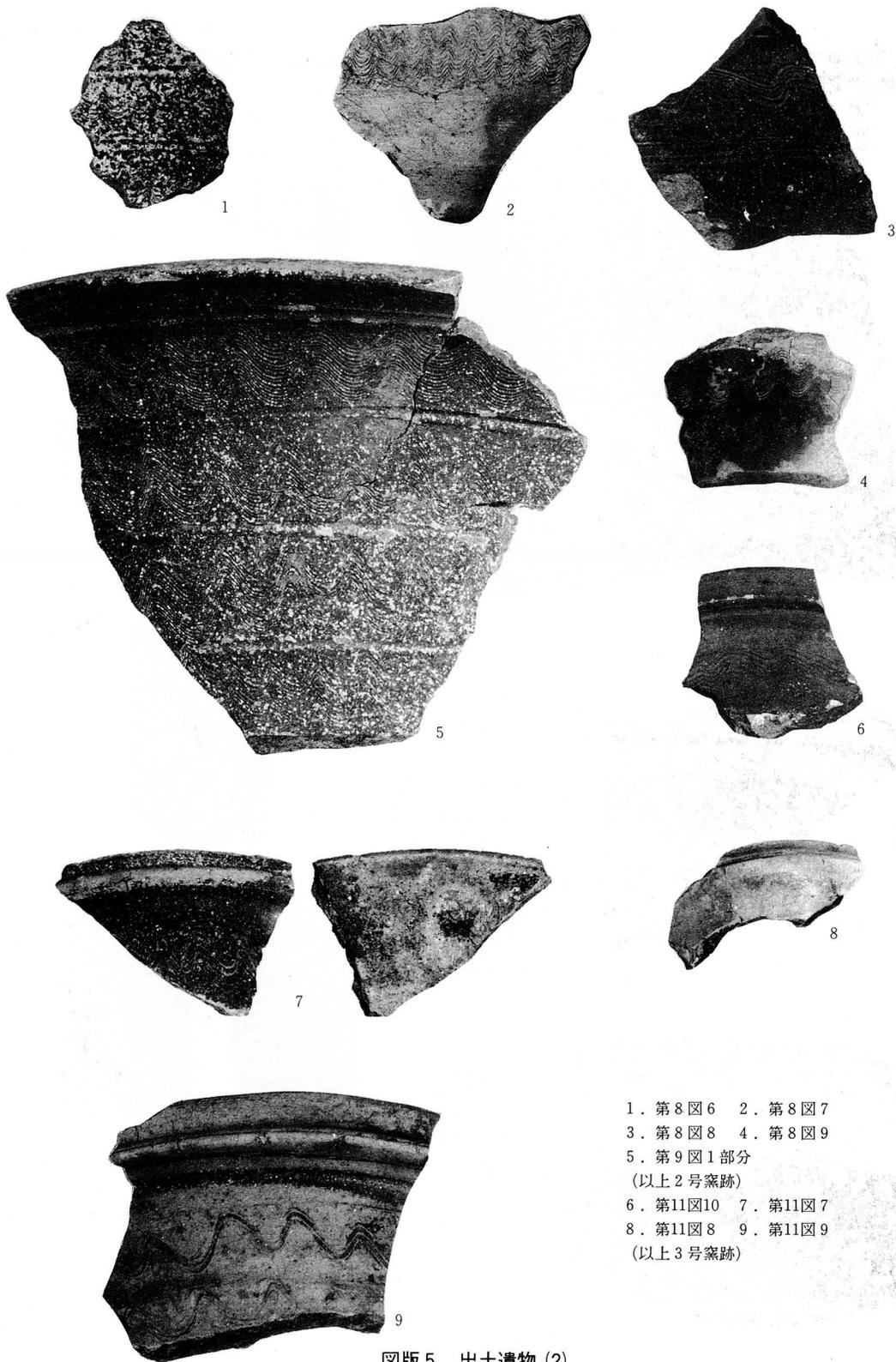
图版 3

上 : 2号窠跡
下左 : 3号窠跡
下右 : 4号窠跡



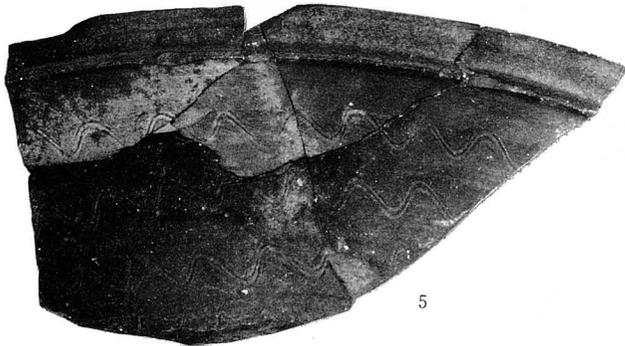
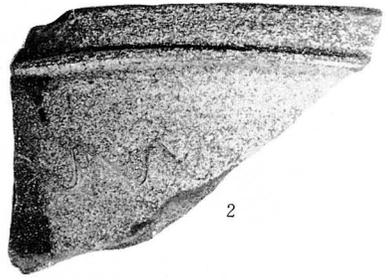
1. 第13图3 2. 第13图4
 3. 第13图5 4. 第13图6
 5. 第13图9 6. 第13图13
 (以上4号窠跡)
 7. 第6图2 8. 第7图1
 9. 第8图1 10. 第8图3
 11. 第8图4 12. 第8图5
 (以上2号窠跡)
 13. 第4图4 (以上1号窠跡)

图版4 出土遺物(1)



1. 第8图6 2. 第8图7
 3. 第8图8 4. 第8图9
 5. 第9图1部分
 (以上2号窑迹)
 6. 第11图10 7. 第11图7
 8. 第11图8 9. 第11图9
 (以上3号窑迹)

图版5 出土遺物(2)



1. 第14図1 2. 第14図2
 3. 第14図5 4. 第14図3
 5. 第14図4 6. 第15図1
 7. 第15図2 8. 第15図3
 (以上4号窯跡)

図版6 出土遺物 (3)

文化財調査報告書第6集

北 日 ノ 崎 窯 跡

昭和63年3月20日印刷

昭和63年3月31日発行

発行 村田町教育委員会

柴田郡村田町大字村田字迫16
電話 0224(83)2111

印刷 株式会社 東北プリント
仙台市立町24-24電話(263)1166

